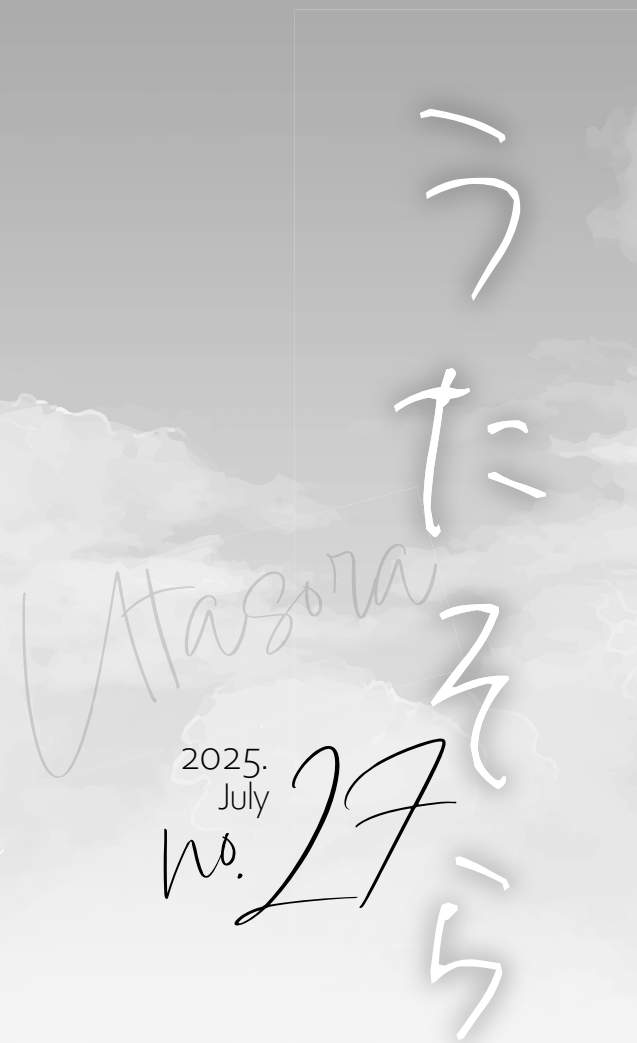


参加者一覧	02
連作欄 8首の連作 自由詠.....	03
テーマ詠欄「度」	12
一首評「そらよみ」.....	15
短歌リレーコラム「望遠鏡」	16
リレーエッセイ「いちごいちえ」	18
次回予告・編集後記.....	19



うたそら 第27号

発行：2025.07.01

編集・制作：千原こはぎ

@kohagi_tw <http://kohagiuta.com/utasora/>

感想は
こちらまで!

Twitter(現X)ハッシュタグ
#うたそら

「うたそら」では Twitter(現X) での感想をお待ちしております。ハッシュタグ「#うたそら」をつけて、お読みになった感想をぜひお聞かせください。

今号の
うたそら

2025.
July
No. 27

うたそら

ご参加ください
みなさん (五十音順)

2025.
July
No. 27

短歌募集

2025.
No. 28

25 8/31(日) 24時

8首の
連作

テーマ詠
「冷」1首

一首評
「そらよみ」

2025.
No. 29

25 10/31(金) 24時

8首の
連作

テーマ詠
「実」1首

一首評
「そらよみ」

投稿先等、詳しくはうたそらのご案内ページをご覧ください
<http://kohagiuta.com/utasora/>

本格的な夏!のような日が
多くあまり梅雨感のな
かった六月も終わり、七月
となりました。皆さまい
がお過ごしでしょうか。
わたしは結局六月は一度
も出かけず、季節感もあ
まり感じることなく、ただ
だこもって仕事をするば
かりでした。夏生まれな
ので七月こそ、あちこち
出かけたいと思っています。
素敵な夏となりますように。
次号へ切りは8月末、発
行は9月頭です。テーマ
詠のお題は「冷」。ぜひ
ご参加ください!

編集鳥 千原こはぎ

参加歌人様

48名

連作欄 34名

テーマ詠欄 36名

一首評 2名

リレーコラム
望遠鏡 西鎮 さん

リレーエッセイ
いちごいちえ 瀬斗みゆき さん

ご寄稿いただき
ありがとうございました!



編集後記

石川順一	井倉りつ	雨宮雨霧	雨声	麻月	麻倉ゆえ	麻数
@Hiler57	@utra_litz	@Amamiyaamaki	@amago931854	@jg_asatsuki	@AsakuraYue	@unberhemp
桜さくう	坂口栞	くろだたけし	久保田毒虫	香子	橘高なつめ	キチヤツキノ
@wjs98NwfuJvq3	@tkuro2016	@dokumu44	@kyoko_shogi	@coconutkiko	@jiyuusenku	@kate_kawagishi
福山桃歌	笛地静恵	廣珍堂	薄荷。	畑 依裕	袴田朱夏	中村成志
@momoka_fukuyama	@ymc6rhIEZgwg	@Hirochin_dos	@aieohimeco	@hakamada_shuka	@nakam8	@kohagi_tw
						@hazuki1815
						@suzusuzuz2009
						多香子
						たえなかず
						砂山ふうり
						寿司村マイク
						@xtksbNR4w1wj8M
						西鎮
						@xi_zhen_ivUT
						鹿ヶ谷街庵
						@kasamabakuchi
						古井 朔
						@saku_furui
						真岡まな
						@mao_or_mana
						まごちかゆう
						@_yunatsu
						御糸さち
						@MEATsachi
						水上歌眠
						@kamin_plz
						南の島
						@_nrkmm
						水也
						@m_jya_o
						六厭めれう
						@mecomumai
						村田一広
						@mmuc2022
						望月ゆい
						@m_yukiyuki7
						森内詩紋
						@Njq4oEv95glRpu

計48名
たくさんのご参加
ありがとうございます!

27

リレーエッセイ

いちい

い

え

前号の人の短歌から一語を摘んで
それをテーマにエッセイを書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

テーマ

書き手

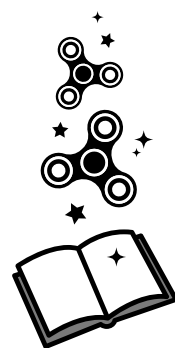
子ども
瀬斗みゆき

去年、駅の電光掲示板で電車の出発時刻を確認していたときのこと。小学三年生くらの男の子が、金色のハンドスピナーをくるくる回しながら改札に向かっていているのを見た。うおーまじか、と思った。いま令和だよな、と。一瞬すれ違っただけだったけれども、それは確かにハンドスピナーで、照明の光を受けて面白いくらいピカピカしていたのをはつきりと覚えている。どうして気に入っているのだろうか？まだ売っているのかな？そもそも何で知っているのだから？

う？疑問は尽きない。もしかしたら、かつこいと思つてやつていたのかもしれない。流行りのものより、マニアックなものを好む方がかつこいと思う感性は、私たちにすらあるだろう。少年にとつてそれがたまはハンドスピナーだったただけなのだ。あるいはこんな捻くれて考えなくてもいいのかもしれない。あらゆる娯楽がデジタルに集積しているこの時代において、金属の確かな重みと、ベアリングの駆動するアナログな感覚に魅力を感じている可能性もあるだろう。

調べてみると、ハンドスピナーが流行ったのは九年前らしい。(これを読んでいただいている皆さんにも、ぜひ一度ハンドスピナーと検索して、Wikipediaの「流行」の項目を読んでいただきたい。当時のロシアの政治について、興味深い記事を読むことができますよ。)少年を見た時は、今がほんとに令和なのか疑ってしまったけれども、そもそも流行ったのが平成から令和に移るぎりぎり手前だったということに驚きだ。そのとき私は中学一年生で、部活のみなど晩ご飯を食べに行ったあと、地元の本屋でハンドスピナーを買って帰った覚えがある。当時は本屋にすらハンドスピナーが置いてあったのだ。中学生になるまで、夜に出かけるなんて経験は滅多になかった。その時の妙な興奮と罪悪感、そして街灯の光を受けて輝きながら回転するハンドスピナーは、今でも強く記憶に残っている。

リバイバルブームは二十年周期で来るらしい。もう十数年したら、街中の少女がハンドスピナーに熱中している光景がまた見られるかもしれない。そのときは、親や祖父母になっているだろう私たちが、呆れながら子どもにハンドスピナーを買ってあげるのだ。私たちにはその責任がある。



また会えたときには君が口ずさむヒットチャートで気づきたいんだ

瀬斗みゆき

連作欄 8首の連作 自由詠 #うたそう

LIFE

雨宮雨霧

藤棚のベンチに座り目を閉じるそよ風なびく春の始まり
うぐいすの鳴く練習をこつそりと応援しては心は軽く
立ち上がりふと見た花に手を伸ばす芽吹く命に息を吹き込む
葉桜の初々しさに頬伝う雨は人生ここからと云う
閑散とする道を行く雨の日にねこの見つめ合いを始めた
雨上がり淡い青には七色の橋が創られ足取り軽く
たんぽぽの綿毛を飛ばし夢を見る青空を舞ういのちのかから
水たまりバシヤンと踏めば水面を流れる雲に乗れる気がした

Desert chrysalis

井倉りつ

サボテンを枯らすあなたと腐らせるわたしの間に波うつ砂漠
正常に動作「できない」欠陥を愛し合えると思った 檸檬
飲んでつて言われるままに飲み干してわたしたちには境界がない
ほんとうに見えない壁があるみたい あなたは自由に行き来するのに
「しつこくない？俺は忘れてあげたのに。まだ怒るとかなんか残念」
アムネシア あなたひとり忘れてもなかったことにはならないんだよ
見てあそこ、透명한花が咲いている。空っぽな人が埋まってるのね。
飛べるようになったからもう行くな ずっとどろどろでいたかったけど

四阿に机無くなりアメンボウ段々の滝は泉の如きか
カラオケでジンジャーエールを飲まなくて鯉が水草を食い千切る水路
生花の向日葵直ぐに枯れ始め姉は歯医者に通い始める
グラウンド中心部分に鳩が居る切り取られたる銭葵の碑
青秋は咲くまで時間が掛かるから切らない抜かない枯らさない
物有れば記憶が補強されるから容器と蓋を取り戻して来る
気球とは浮くものである芙蓉咲き多数の虹の玉が吹き散らされる
公園のクチナシの花に気付きたり柊の花が咲くまで待てない

屋上猿部27

宇祖田都子

屋上で猿が眠れば五限目のメスシリンダーカタカタ揺れる
見下ろせば見上げる猿が映る池完膚なきまでに青い空
屋上の金網越しに垣間見るあぢさゐ？ いえ水を飲む猿
学校の中を突つ切り真西へと猿がタクシーを追っている
非常階段そつと覗けば猿たちが頬杖ついて油断している
人文字を写すドローンがぶつかった見えないものは猿だったこと
学校が巨大な猿であるような気がして帰る時振り返る
雨の日の猿は少しも動かない 愛しています愛しています

中将姫になるワタシ

かの王は静かに眠る。その夢を黙した口に玉と含みて
死者たちはどこへゆくのか わきあがる思いは風に雲とちぎれた
まつすぐな夏のひかりに泥濘が蓮を一輪空へ差し上ぐ
人あまた散りし昔の大日本、厨子扉には金泥の花
右肩の夕陽を遙かおもうとき、広厦なる背の當麻曼荼羅
何遍も解いて説かれた縁起絵に祈りはふかく皺をのこして
青碧の生地が波うつ海原へ唐天竺を想う日の暮れ
当麻路にかぼそい影で師もかつて姫の歩いた日を追っていた

石のベンチ

涸れ井戸

土曜日に泥書房行く十一時鍵閉まって鴉も来ない
若者がふつと現れ去って行き五分後また来て去って行った
十五分待ったがそこで諦めて新町通り南に下る
下京区図書館で新聞を読み山下澄人『砂漠ダンス』を
十五時に松屋でウマトマを摂取小雨の中を河原町へと
OPA八階の古書肆を涉獵し山下澄人の新刊を買う
木屋町の石のベンチで日記書き三十分後味ビルへ行く
味ビルで訓練校の同期会悲喜こもごもの濃い後日談

どれも良い歌だ。(一部句跨りはあるものの) 定型遵守の点で一致している。何より六首が六首とも、景が明瞭だ。これは具体的な出来事の叙述やアイテムの配置によるところが大きい。また、三十一音に収めるのに最適なサイズの情報量を選択していることもリーダビリティに寄与していると思われ、「うたの日」で首席を得るに足る射程圏の広い歌だと思う。
次に二人がそれぞれ、第七回笹井宏之賞山崎聡子賞、第十四回塔新人賞を受賞した際の一連から、三首ずつ引いてみる。

夕闇に誰かの肩がとけのこり濡れ足りぬ木々を
帆柱にする

記憶以外すべて余生であることをうずくまりつつ
薔薇はほぐれて
心臓は緋色の錨 ふたまわり小さいそれを灯し
にゆくまで／石村まい『ひかりまみれのあんず』

この土地の隣寸のように揺らぐ語尾あなたを通
さず聞こえていたり
どの世でも月を見上げるわたしたち雛鳥のこと
喉をさらして
つばめはいつも旅の途中ということにひかりを整
えながら祈った／toron*『ツバメノート』

先の六首とは幾つか相違点がある。定型からの逸脱があり、景として結ばれる像は読者によつて異なりそうだ。連作の中で他の歌や一連の構成と影響しあうことで、読み手への訴求性が高まっているように思う。またこれらを要因として、うたの日の歌よりも

「首を読み解く」というカタルシスを得るまでの工程が複雑化・高度化しており、そこから前述の「質量が生じているように思う」。

リーダビリティとは何か

先ほど「分からないけど惹かれる歌」には「質量に付帯する重力」が生じていると書いた。その重力の本質とは何か。右で述べた「カタルシスへの工程の高度化」もその一部のように思えるが、そればかりではなさそうだ。こうした短歌におけるリーダビリティの本質について考える中、興味深い記述に出会った。

「言葉が届くというのはどういうことか。それは「わかりやすく書く」ということではありません。論理的に書くということでも、修辞を凝らすということでも、韻律が美しいということでもありません。そんなことはリーダビリティにとって二次的なものにすぎません。いちばんたいせつなのは「私には言いたいことがある」という強い思いだと僕は思います。そしてその思いが最大化するのは、(中略)「言葉が届くはずのないほど遠い人」になお言葉が届かせるべく、身をよじるようにして語るといふふるまいにおいてではないでしょうか。」

／内田樹『呪いの時代』(二〇二一 新潮社)より抜粋

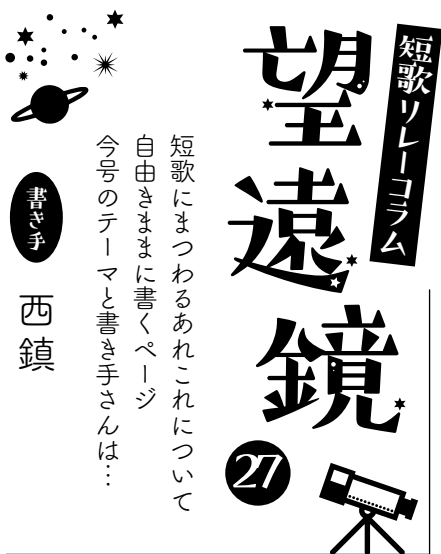
ここでの内田の記述は、太宰治らの文体を例に引きつつ、表現者が肝に銘じるべき示唆に富んでいる。内田はこうも説く。

「リーダビリティを構成する条件は、表現者の受信者に対する敬意です。「あなたの知性を以てすれば、私が言いたいことをただしく理解できるはずである」という受信者の知性に対する信頼の上に築かれた言葉は読者にまつすぐ過たず届く。」

／同

この「表現者の受信者の知性に対する敬意」こそリーダビリティの本質だ」という観点でこまを振り返れば、「分からないけど惹かれる歌」が持つ「質量に付帯する重力」とは、即ち「読み手の知性に対する歌人側の敬意」ということになるのかもしれない。今回、短歌のリーダビリティについて、当初は「理解しやすさ」わかりやすさ、リーダビリティ」という前提に立ち、主に作歌における技術的な発見を狙って考察を始めた。しかしながら他分野での論述に触れることで逆説的に、作歌姿勢において技術以上に求められる本質を突きつけられた思いである。よく「読者を信頼せよ」と言われるが、これまでどれ程「受信者の知性に対し敬意を持って」作歌に取り組めてきたか、私自身、自信が無い。これを糧に、詠む者として僕でも成長出来たらと思う。

以上、うたの日・Twitter 育ち (toron* 氏流に言えは野良歌人) である私の、思考を垂れ流すような雑文になつてしまったが、正にここで扱ったテーマのように(たとえ射程圏は狭くとも)、どこかの誰かに届いてくれればそれほど嬉しいことはない。日々詠む歌について、しばしばそう願うように。



短歌にまつわるあれこれについて
自由きままに書くページ
今号のテーマと書き手さんは…

書き手 西鎮

テーマ 短歌における リーダビリティについて

はじめに

先日、Xにおけるスペース「分らないけど惹かれる短歌を語る会」を拝聴した。外村ぼこ氏を中心としたメンバー（外村ぼこ、石村まい、小仲翠太、霧島あきら、斎藤君、全美、以上、敬称略）が他のメンバーの「分らないけど惹かれる短歌」を引き、全員で評していく。「好きなんだけど、説明できない」歌の正しい読みを見出すというよりは、作者も交え、参加者それぞれに響いた読みのディテールを味わい共有していく流れで、そうした場の方向性も好ましかった。私としては、一部の歌に対し比較的明瞭な読みのイメージが生じ、それが心地よくそれを左のようにタイムラインへ放流するなどした。

何もかも知らない街

河岸景都

家からの距離が離れていくほどにビルの反射に怯んでしまう一瞬でそこに生まれてきたようなテナント募集の新しい紙グラスには結露の雫ここにいいていいと私は言われたかった休日はずっと消耗品のまま花瓶の百合の白が目につく空港に飛行機はまだ帰らない椅子に座ったままで眠った前に見た写真の角度を真似て撮る嘘を吐くのは良くないらしい新しく額縁を買う新しく飾った絵だと思わせたくて夕焼けがもう見えなくて何もかも知らない街のように歩いた

まだ、（一）に

キチセツキノ

ねこの朝しんと夜まどう心配して近くにありて遠きをおもふゆつくりと陽のほびをふくませてふくらむ毛並み春の呼吸よときおりは人に耳すまし交わりぬ尾をそっと寄せ名を忘れずに夜ごとと姿うすれて深まりぬかの場所にて夜を押さえおねこたちは人生しまふそのときはもう覚悟などすませしあとかそれはただ突然にして急ぎゆく光のごとくあの角を曲がるいつもどおりかわらぬ先を見つめつつふりかえりつつ足音もなくなにもかも風にまかせて渡したるあの背中こそわたしの朝よ

太らせず痩せさせずしてお互いをりんこの無味の夕暮れに倒す

／石村まい（外村ぼこ選）

好きな歌。〈りんご〉はイヴのそれを暗示させるが、〈無味の〉が効いている。これは別の甘いものを口にした後の〈無味〉か。〈倒す〉は性的かつ「タスクを倒す」等のニュアンスもあるかな、と。蜜月を過ぎた二人のマンネリの、褪せてゆくが故の美しさか。

ひとりでは取りにいけない鍵のこと 夜明けの桃の傷の甘さに

／石村まい（小仲翠太選）

好きな歌。〈鍵〉は「性交渉」と読んだ。触れればそこから傷んでゆく〈桃の傷〉からは、そうした関係性に対する主体の心象……消極性と憧憬の間での揺れが読み取れる。一歩踏み出せないまま迎えた、夜明けの前の寢室の、その静謐が想起された。

短歌において「説明しすぎないこと」は最も重要な規律の一つであろう。これを踏まえ我々は、定型という弾倉に込めた抒情や韻律を放ち、読者を撃ち抜こうとする。また多くの歌人は、意味が明解な歌よりも、解釈に手間のかかる歌にこそ寧ろ、惹かれるようだ。一方で、私も参加してきた「うたの日」をはじめ、一部の短歌シーンでは、一読して意味の分かる、キャッチーな歌に評価が集まる場合もある。

届ける／分かる／惹かれる
読み手に適切に届く言葉は、「リーダビリティ」を備えている。届ける以上、その「射程圏」があり、

どうも詩においてはこの射程圏とはトレードオフの関係として、個々の読み手を撃ち抜くための「詩の質量」があるように思える。射程圏が狭いほど、質量は高まる場合が多い。

こう考えたとき「分らないけど惹かれる」という現象は、どう解釈できるのだろうか。射程圏が狭められ、特定の読み手に対し質量を発揮している歌には、その大きな質量に応じた重力が生じていて、他の読み手はその重力に「分らないけど惹かれ」てしまうのかもしれない。

リーダビリティを使い分ける歌人たち

具体的にみていこう。同じ作者による、異質なリーダビリティを持った歌を読んでみる。今回は石村まい氏と Ison* 氏の歌のうち、まず二人がウェブサイト「うたの日」で首席を獲得した歌を三首ずつ引く。

児童書のところでふつと立ちどまるあなたの過去にさわってしまふ

題詠 『児』

永遠の最後の画をのぼるとき羽がほしかったのだと気づく

同 『永』

公園の土管に雨がしみてゆく ふたりきりつてすぐひとりだ

同 『雨』／石村まい

ストレスの今日の値はこれくらいホールケーキを鈍角に切る

題詠 『鈍』

食らいつくように吹かれて青年の言葉を濾過してゆくハーモニカ

同 『食』

窓拭きの青年しずかに降りてくる磨き抜かれた空を背負って

同 『負』／Ison*

急行の停まらない駅で

橋高なつめ

来ないつて分かっているのに急行の停まらない駅名を教えた海にふる雨と一緒に消えてゆく許せなかったことの幾つか駅前のサ店はとくに本当のレモンを入れないティーバッグだし肝心なスパイスいつも忘れてる砂粒だらけのクラムチャウダーこれからの二人について話すこと無いから夜を早送りしてしばらくは見えている街が消してゆく優しい撫で肩のフォルムを窓辺から身を乗り出した手のひらを雨後のひかりで清める為に笑ってるあれ私かもしれない残像みたいな海を背にして

wavering

香子

帰したくないし帰りたくもない無邪気に言えば許されますか冗談に慌てる素振りの横顔は手の届かない距離と知りつつ別々のホームで放す手よ君の戻れる場所でありたかったよ「秘密だよ」紫陽花だけに打ち明けるあの日の色彩薄れ消えゆく思い出す時間が短くなるにつれ夢の雫は輪郭失ういつもより早い梅雨明け乾かすは白いTシャツ少しの涙ひと時を重ねてみても真っ直ぐに進まぬ波形すら愛おしき飾りなき心ごと君に捧げよう「ほんのつまらぬ物ですけど」

愛も買えずに

久保田 毒虫

何もかも値上がりしてる夏の午後この暑さなど気にならぬほど
何もかも値上がりしてる夏の午後貯金箱には悲しみだけが
何もかも値上がりしてる夏の午後愛を買うには余りに高い
何もかも値上がりしてる夏の午後夢を買うには余りに高い
何もかも値上がりしてる夏の午後明日を夢見る気持ちでさえも
何もかも値上がりしてる夏の午後希望でさえも消費税込
何もかも値上がりしてる夏の午後せめてあなたがいてくれたなら
何もかも値上がりしてる夏の午後ブライスレスな日々になるのに

今年の梅雨は短かった

くろだたけし

雨の日に歩くときだけ思い出すわたしの靴は布製である
人並みの人生だから急に来る国際電話は迷惑電話
勝ち越した分はどこかで負け越して電子レンジでイカははじけて
カミナリが落ちたニュースを見たあとでもいい油断したまま生きる
別々のものを探していたはずがわたしの顔のすぐそばに蜂
コンビニがいつか遺跡になるころに想像される僕らの暮らし
洗っても少しきかないフィルターは汚れるために作られたもの
一滴の汗も流さず夏蝶は暑い日射しの中もひらひら

水無月

桜さくう

今週の情報位置を消去せりタイムカードを夕陽に差して
凝り凝りのわたしに水と音をたす金曜夜のズンバ教室
something to believe クールダウンに口ずさむ六十分を踊り果たして
煙突は朝から梅雨に濡れていて君のダジャレに吹きだせなくて
夏至の日のあかるい夕に帰りつきグラス冷やして夜をはじめ
梅の実の落ちる音するていねいに暮らしてみようこの週末は
百寿まで生きたらここにお互いの火花を上げる夏のたわごと
夕空に虹を見上げる誕生日 花を抱えて歩いてゆこう

同期している

鹿ヶ谷 街庵

もうボール投げはやらない？そうだよ、犬には犬の事情があるね
川岸のツツジの蜜を吸うときに君と不埒なこともにもどる
残業の夜のわたしのかすむ目に雨のしずくのひかりの氾濫
10代で破滅したいと思ってたころの破片が降る夜がある
すり減って形の変わった靴だけが僕のころと同期している
番犬のつもりで飼った柴犬が家長のように上座に座る
消える魔球ばかりを使う叔父さんが来ると隠していた野球盤
できるだけ笑っていたくてできなくて多めに水をやるばらの花

一首評

そらよみ



前号の「うたそら」から
気になった一首をとりあげて
200文字くらいで語る
一首評のコーナーです

死のことを小さいころは知っていてやがて忘
れてまた思いだす

くろだたけし

〈知っていて〉が秀逸。幼いころ「死」を過度に怖れ
た記憶のある方は少なくないはずだ。自身や肉親の
死をリアルに想像し眠れなくなった少年期の夜が、自
分にもある。だが思春期を経て、若さと成熟とを両
立してられる（たぶん）二十数年、確かに多くの
人が死の呪いから一時的に離脱できる。それを再認識
させられた。壮年期以降の心境をさらりと詠い着地
する結句。この語順、韻律……たんとした詠い
ぶりが、この歌意には最適だ。

一首評

西 鎮

「そらよみ」一首評募集

前号の「うたそら」からあなたのお気に入りの
一首を引用し、その歌について200文字以内で
お書きください。お一人につき一首まで。
ご自分の短歌ではなく、他の方の
作品でお願いいたします。
公序良俗に反するもの、作者や
他人の人格を傷つけるような投
稿は掲載できませんので注意
ください。

ご投稿はこちらの
投稿フォームから！



一首評

中村 成志

夏だから仕方がないねおにぎり与会話して
いる姉さんを見る

砂山 ふらり

正直、意味は掴みづらい。「仕方がないね」と言っ
ているのは「姉さん」なのか、その姉さんを眺めている
他者なのか。夏だと何故仕方がないか、会話している
場所はコンビニ等か自宅で手に持っているのか、姉さ
んは血族か。そもそも一塊でなく、初句二句／三句
四句／五句と分かれた文として平行して読むべきな
のか。読むほどに謎は深まるばかりだが、この微妙に
脱力して気の抜ける文体が素晴らしい。姉さんのそ
の後が気になる。

はっとひととき

気転聖に

クロスワード

こたえ

前号の答え

カイキンシャツ

前号のクロスワードはいかがでしたか？
次回もどうかお楽しみいただけますように☆

1	ツ	2	カ	3	イ	4	カ	5	タ	6	セ	7	ワ	8	ヒ
9	バ	10	ド	11	ミ	12	ン	13	ト	14	ン	15	ツ	16	キ
17	ヤ	18	ウ	19	ラ	20	ビ	21	ゴ	22	ウ	23	ユ	24	ス
25	ド	26	テ	27	ア	28	ク	29	ニ	30	ル	31	イ	32	ホ
33	マ	34	ツ	35	ミ	36	ナ	37	オ	38	イ	39	チ	40	ル
41	ツ	42	マ	43	サ	44	ク	45	セ	46	ン	47	ン	48	イ
49	ネ	50	ム	51	ケ	52	イ	53	チ	54	ド	55	カ	56	ヨ
57	シ	58	ゴ	59	ト	60	ビ	61	シ	62	ヨ	63	ウ	64	ジ
65	モ	66	ト	67	ウ	68	ケ	69	ヨ	70	ウ	71	ジ	72	ウ

- ◆ 氷点下三十度なるドアノブの開け方語り抑留者死す
- ◆ アゲハ蝶と衝突した影響で上下線運休復旧のメドは立っていません
- ◆ なにかもゆるしてほしい朝 きみのパジャマを抱いてあかるい二度寝
- ◆ フラジール言われた記憶をシェーカーに度数高めのカクテル飲み干す
- ◆ あなたには驚かされるのいく度も恋に落とされときめく度に
- ◆ 分度器できみの頬杖測ったら毎日違うきみがいました
- ◆ エモいつて感じた時に血中のエモグロビンの濃度が上がる
- ◆ 態度ではなくて態度であつてます熊の度合いを測るのだから
- ◆ 九十度と六十度と三十度みたいな三人だから話せた
- ◆ もう一度永遠になれ手のひらを掠めた花のひとつひらはゆく
- ◆ 涼しさを求め緯度は1度ずれ上野のパンダは笹をはんでる
- ◆ この夏はエツチスケツチワンタツチ恋も付度無しにしようぜ
- ◆ 廣珍堂
- ◆ 笛地静恵
- ◆ 福山桃歌
- ◆ 古井 朔
- ◆ 真岡まな
- ◆ まつさかゆう
- ◆ 御糸さち
- ◆ 水上歌眠
- ◆ 南の島
- ◆ 水也
- ◆ 望月ゆい
- ◆ 森内詩紋

アラスカンマラミュート

西鎮

雨だとか紫陽花だとかリフレインするものばかり殖える六月
海のない故郷なのにふるさとを想えば胸にアジサシ疼く
ひとりきりの朝陽は軽い遙々とあなたを返してくだる駅前
立葵 わたしのは置いてゆけ、と誰かに云いたいだけだった朝へ
あかねさす公園口のその先のわたしの知らないあなたの家族
あなただけのアラスカンマラミュートになってまっとうできない夢の天寿を
ガレージ式ラブホテルしか選ばないひとと続いた三年がある
はつ夏の（ダイヤモンドの硬質の、透明の、いやあなたの）涙

終活の家

寿司村マイク

台拭きはゆるく絞られ後頭部の乱れた母からもうほうじ茶
ガラクタに囲まれすこし幼氣に隣の隣の世界にも部屋がある
現役のテレビは切り替え前買った 地デジ／アナログコンボリモコン
残薬の山を戸棚に匿ってしよっちゅう自身を誤魔化している
でも母と子供の頃の僕が見た庭には蘇鉄が二本生えてて
片付けを済ませてしまおうさよならを伝えたら出てゆこうよ母さん
水を撒く解体工はきらきらと半分壊したビルに立っている
ひとり暮らす家の二階にそのままの学習机と『森田療法』

S (UNAYAMA) F THE IIIRD

砂山ふうり

形だけでいいからそこは謝って置いたらいいよカルピスの箱
予想した通りに財布ふくらんで8%胸が重たい
終わりまで飲んで騒いで帰る部屋何処にあるのか分からぬ夜明け
薄味に春の光が射し込んできつねがわたしの祠に入る
ぴちぴちのカレーうどんに驚いてカレーてんとう虫胸につく
早出しのチョコキで待ちたる幼子へ負けて嬉しい後出しのパー
もう秋と思えるバスに乗りながら思い出せない自動車の鍵
向日葵のように騒いで帰ったら何だかさみし日だまり残る

ギガをあなたに

たえなかすず

夏ドラマ始まる 大人の恋愛の打算を知らぬきみを横目に
よく眠った日に着る白いカーディガン超現実的な女になれる
本棚の窓に雨だれ 凶鑑から飛んだ星座の顛末知らず
前髪をばつんと切って街なかを泳ぐ十代やや青みつつ
ハートつける新たな虚無に微笑んで残り少ないギガをあなたに
数秒で変わる性格こいびとへやわらかに雲垂れてきそうで
書き置きに五月雨 いつもの追伸がなくて三点リーダー多し
自転車の荷台も夏のTシャツもあつけらかんと空 どこかで逢おう

七夕に生まれて

多香子

七夕に生まれて純な乙女です青い花咲く朝顔の露
睡蓮はニンフの嘆き聞きながら眠り続ける真夏の夢を
ぶつ倒れ見上げる部屋の天井に天使の形の台風のしめ
朝顔の蔓はあなたに巻き付けど誰も知らない私の気持ち
織姫は彦星でない人とてもデートしたいと思うのですが
一年に一度の逢瀬そんなこと約束できない夏はきまぐれ
くちなしの色して天から落ちて来る墮天使とわたし傷をなめ合う
七夕に生まれてあなたに恋をしてどんな運命待つのでしょうか

入園おめでとう

田邊葉月

「いつまでもいっしょにいてね」3歳の「いつまでも」っていつまでですか？
「これなあに？」1歳の、2歳の、3歳の、きみが大好きだったものだよ
丁寧におなまえを書く身に付ける全ての物よお守りになれ
家は子宮固く繋いだ手を離してもう一度産む「いつてらっしゃい」
約束を胸に抱えてただひとり振り向かず行く小さな背中
満面の笑みで帰り来る子の頬に守れなかった約束の跡
空っぽが嬉しいお弁当箱よわたしおかあさんになったんだ
泣かないで登園した日お母さんは泣いちゃったこといつか聞いてね

度数

千原こはぎ

連絡の頻度は減って温度差をまた言われるのだろう ゆうぐれ
いつだって夏がくる前に終わる夏至これから減ってゆくだけの昼
逢えなくて平気なままの数ヶ月 眼鏡の度数をまた上げている
十年も前に疎遠になった人みたいにあなたもなるのだろうか
何を観ても泣けなくなってもう折れてしまえ感度の鈍いアンテナ
「花の香り」ピンク色したトイレ紙の過剰さ今日はぜんぶうるさい
どこまでも風であること、何ひとつ揺らがらないこと、つまらないひと
三十五度なんて六月ばかりみたい舗装道路に焼けて消えたい

顎で抱えて

中村成志

うずくまる高さへ咲いた紫陽花の鞠へと泥が乾いて染まる
「あなた方」括られてゆく心地よさの風を大きく吸い込んでいる
ヴァイオリンは顎で抱えて何よりも奥歯が大事 眉根もだいい
だいじようぶ動かなければ暑くない気付かれないまだ時間じゃあない
鳴禽がひととき騒ぐ街路樹の日暮れ むやみに赤が見たいよ
しりとりでするいじわるのような雨 動くとき暑い黙るとさむい
雨降りだったと母が教えてくれました病院に紫陽花があつたとも
全身の筋力を持ち手を叩く掌と掌を合わせ時間の限り



「度」

テーマ詠

なぜこうも夏は私を絞めるのか殺す気のない柔い温度で
心身の温度変化を探る時まだ不確かな芯の輪郭
謝罪は 四十五度の 深いお辞儀 つま先がみえる あ、汚れてる
聴き失う音を埋めた前の家の壁目覚める度に呼吸青ざめ
開く度涙ぐんでは嗚咽漏れページを閉じた奇跡と記憶
遭遇する度に吹き矢がほしくなる 音出して動画ふつうに見る奴
温度計数字を見れば二十九度扇風機弱で風を巡らす
今生の別れでしたねまた今度会いましょうねと言ったあの日が
アルコール度数でカクテルを選ぶ度々誘ってくる人がいて
ものすごいスピードで泣く五十度のバンクがなけりゃ曲がれないほど
何度でも繰り返して欲しい出を過去と割り切れないで転がる
鼈甲のセルの伊達メガネをはずすときあらわなるまなこの襞よ

◆ 麻数
◆ 麻倉ゆえ
◆ 麻月
◆ 雨声
◆ 雨宮雨霧
◆ 井倉りつ
◆ 石川順一
◆ 宇井モナミ
◆ 宇祖田都子
◆ 泳二
◆ h's
◆ 小野小乃々

空八首

袴田朱夏

海は遠くに

廣珍堂

生まれない命を命と呼ぶときの先生、曇り空がやさしい
アクリルの盾で互いを守りつつああ空の色だよねその服
空を飛ぶ瓦がいいな古事記からこちらに戻るタイムマシンは
先生の空気力学はそのときも窓からうまく蜂を逃がした
低いほどうごいリンボーダンサーは空をこんなに抱えられるよ
始まってしまえば終わる徒競走ひとりひとりに空やさしかれ
宝石の中だねこはつなつの空をあなたと見晴らしている
この空をどうかあなたのいいことに数えてほしい とおく手を振る

あいいろ

薄荷。

真夏の夜の怪談会より

笛地静恵

あいい色のシャツを着たロメオ本当はあんたちよっぴり寂しいんだろ
三階の窓は大きく開かれて虫が一匹飛びこんでいく
うす青い瓶を透かして眺めればおもちゃ箱めいて騒がしい街
どこからかふわりと光落ちてきて夜には白い穴があいている
寂しさをじつと煮込んでジャムにして真夜中のホットミルクに落とす
朝風を浴びてふくらむレーヨンのネイビーブルーのワンピース、夏
濡れるのは多分それほど嫌じゃない夕立とおなじ水玉のシャツ
この年になって気付いた藍色が一番似合う色だったこと

放課後のだあれもないはずの音楽室からピアノの音が 下手
カミナリのごろごろと夏ぶとん庭ののびるのほめるとのびる
コンクリの道路にくねるミニズ師を路傍の草の影へ返しぬ
「ここはオレに任せろお前たちは先に向け」三次会のレジに立つ俺
偏食で困っています痩せママの首筋ならぶ虫食い二つ
OSの書き換えられぬロボットのメダカのごとくこの世を去りぬ
ゲームからやりたいことの明らかに敵を殺してハーレムと寝る
東海に温帯モンスーンの国ありけり古文書の墨

おしかつ！

福山桃歌

資本主義社会を生きるわたしたち搾取で愛の大きさを競う
 きらきらの初回限定盤ポチる明日も目覚める理由作って
 転がった床に積まれた御尊顔クリアファイルは一生分ある
 俯いて終わる毎日ちっぽけな命を削りガチャを回した
 ポリメチルメタクリレート樹脂掲げこがわたしのアナザースカイ
 仄暗い開演前のステージは月の裏側やっと来れたね
 アリーナに降る銀テープ日常を覆い隠しててよアンコール
 簡単に愛を注いでしまうことのあやうさもろさ推しぬいを抱き

また池袋の話してる

御糸さち

スコーンを買いに池袋へ向かう 「何でもある東京」の一部へ
 転居五度繰り返しても永遠に遠いまんまの街 池袋
 二十年前と変わらずシャイニングするサンシャインシティ燦々
 ひとりなら絶対ラーメン屋だったな PARCOの飲食フロアをきみと
 どの店も人と人で満ち満ちて消去法しか知らないからね
 不思議だよポテトサラダの味玉天わけあっているふたつの命
 何本も何本も電車見送ってそれが幸せだって顔して
 帰ろうか 私ときみときみの父・兄・姉・祖母の住むマンションへ

ねこはじまり

水也

駆けまわるふあふあの毛のきみがいい空を飛びゆくしゃぼんの玉よ
 つかまえた とくんとくんと鳴る音はいのちという不確かなものだ
 ゆれるみみ明後日看向くひまわりの首がまつすぐ伸びていく朝
 曇り空たたき落として雨が降るしっぽの影がグレーに染まる
 まよなかのホットミルクとこんぺいとう うつくしきものを抱いている
 毎日が進む時計もいらないね窓辺の背中とろけていった
 メジャーのいらぬ夕暮れとびはねる毛玉のサイズ世界に増える
 またあしたいいついまでもここにいて陽だまりの下まあるくなって

あじさい日和

六厭めれう

おんぼろの傘は忘れてくる体で雨のち晴れの町へ出てゆく
 メイド・イン・コリアであればかの国の空気も入っている菓子袋
 プランタの中に雑草ひしめいて正しい花の居所がない
 準急の展望席を争って席に着くなり閉めるカーテン
 五線譜に乗るのを遠慮するような音符未満の鼻歌がある
 書くものがなくて切符に書いたこと改札機へと吸われてしまう
 取っ手には「引」と書かれてそれなのに扉に残る無数の手形
 警戒心持ちなさいつて他所の子に懷かれているわたしが思う

夏になくしたもののリスト

水上歌眼

七月に世界は終了するらしく手持ち花火のすごい売れ行き
 「顔がなくなった」と知らせてきた人の顔を一度も見ることがない
 がらんどろコレクターんち呼ばれたら足の踏み場もないがらんどろ
 公園でできないことをするために私に家があるのでしたね
 夏雲になったら名前をつけてほしい、白い名札を持っていくから
 さみしいはなかったことにされすぎてあなたと同じ帽子を買った
 ぴかぴかの夏になくしたもののリスト 書けたらつぎの人にまわして
 星が欠けトマトが欠けてあなたとは耳鳴りのする夏の回廊で

忙しい！

南の島

防犯カメラ用テレビを地デジにし新元号待つ春の中学
 また一人優しい人がいなくなる四十の主任の独立祝う
 いじめ起きつつ図書館システム導入検討しつつ面接しつつ
 濁流の真中に立って止まれよと叫んでいるだけここは教壇
 少年の日の思い出を物盗りのあつたクラスで読む週が来る
 ここちよい能登のやさしさ土までも豊かにふれる修学の旅
 忙しい！口癖になる恐ろしさだって心を亡くすと書いて
 もういいや職場に忘れた携帯を撮りに行かない心は軽い

猫の買ひ物

村田一広

ひとりだと寒いんです夏の七月に青く泡立つ雨ばかり降る
 トラックもタクシーも道端の人もみんな昼寝の昼寝街道
 数歩出たコンビニにまた引き返し傘買ってから開いて帰る
 猫の顔近づいてくる 大丈夫 遊園地へゆく約束は守る
 どの個体にも仕込まれてゐて唐揚げから逃れられないコンビニ弁当
 この夏のさくらんぼは良き出来ばえで光とともに君に届ける
 歩道橋駆けおりて来る子供よりはしゃいでの鞆の白ウサギ
 主人すぐ来ると云ひおき猫が買ひ物をしてゐる夜のコンビニ

旅路ハル・パール

森内詩紋

こもれびを抜けてく列車 斜交いに座るあなたの爪先の向き
 珍しく乗り物酔いをしていない何を緊張しているんだか
 ヒコークに怯えたふりで手をとつてしまえばいつそ良かったのかも？
 起きてまだ半日なのに私たちこんな遠くに来てしまったね
 夏の陽がゆつくり海に落ちていく よかった ここにあなたとこれで
 雨、ぬるい雨 サンドルのあなたの爪が淡く光って
 港からこぎだしていく私たち どこまでもずっと進んでゆこう
 八雲立つその八重垣の水占を思い出してる夏越の祓え